

○国土交通省告示第 号

建築基準法施行規則（昭和二十五年建設省令第四十号）第一条の三第一項第一号ロ(2)(ii)の規定に基づき、この告示を制定する。

平成十九年 月 日

国土交通大臣 冬柴 鐵三

建築基準法施行令第八十一条第二項第一号イ、同条第二項第一号ロ、同条第二項第二号イ又は同条第三項に規定する国土交通大臣が定める基準に従った構造計算によりプレストレストコンクリート造の建築物等の安全性を確かめた場合の構造計算書を定める件

建築基準法施行規則（昭和二十五年建設省令第四十号。以下「施行規則」という。）第一条の三第一項第一号ロ(2)(ii)の規定に基づき、プレストレストコンクリート造の建築物の構造計算書及び構造計算概要書を次のように定める。

一 建築基準法施行令（昭和二十五年政令第三百三十八号。以下「令」という。）第八十一条第二項第一号イに規定する保有水平耐力計算と同等以上に安全性を確かめることができる構造計算によりプレスト

レストコンクリート造の建築物等の安全性を確かめた場合 構造計算書を別表一、構造計算概要書を別記第一号様式とする。

二 令第八十一条第二項第一号ロに規定する限界耐力計算と同等以上に安全性を確かめることができる構造計算によりプレストレストコンクリート造の建築物等の安全性を確かめた場合 構造計算書を別表二、構造計算概要書を別記第二号様式とする。

三 令第八十一条第二項第二号イに規定する許容応力度等計算と同等以上に安全性を確かめることができる構造計算によりプレストレストコンクリート造の建築物等の安全性を確かめた場合 構造計算書を別表三、構造計算概要書を別記第一号様式とする。

四 令第八十一条第三項に規定する令第八十二条各号及び令第八十二条の四に定めるところによる構造計算と同等以上に安全性を確かめることができる構造計算によりプレストレストコンクリート造の建築物等の安全性を確かめた場合 構造計算書を別表四、構造計算概要書を別記第一号様式とする。

附 則

この告示は、平成十九年六月二十日から施行する。

別表一

		(一)	
特別な調査又は研究の結果等説		使用構造材料一覧表	構造計算チェックリスト
法第六十八条の二十六の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた	建築基準法（昭和二十五年法律第二百一十号。以下「法」という。）第三十七条の認定を受けた指定建築材料である場合にあつては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力度及び材料強度の数値並びに認定番号	使用材料の許容応力度及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法	プログラムによる構造計算を行う場合において、申請に係る建築物が、当該プログラムによる構造計算によつて安全性を確かめることのできる建築物の構造の種類、規模その他のプログラムの使用条件に適合するかどうかを照合するための事項
		構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用されるすべての材料の種類（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位	別記第一号様式による構造計算概要書に記載すべき事項
			別記第一号様式による構造計算概要書
			構造計算書の種類
			明示すべき事項

略伏図	<p>(二)</p> <p>基礎・地盤説明書（施行規則第 一条の三第一項表三中の規定に 基づく国土交通大臣の認定を受 けた場合で当該認定に係る認定 書の写しを添えた場合にあつて は、当該算出方法に係る図書の うち国土交通大臣の指定したも のを除く。）</p>	明書
各階の構造耐力上主要な部分である部材の種別、配置及び寸法並び	地盤の許容応力度、基礎及び基礎ぐいの許容支持力の数値並びにそ れらの算出方法	構造計算において用いた支持層の位置、層の構成及び地盤調査の結 果により設定した地盤の特性値
基礎の種別	基礎の工法（地盤改良を含む。）の種別、位置、形状、寸法及び材 料の種別	地下水位（地階を有しない建築物に直接基礎を用いた場合を除く。） 地層構成、支持地盤及び建築物（地下部分を含む。）の位置
地盤調査方法及びその結果	構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容	特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合に あつては、その検討内容
構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容	構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあつて は、その認定番号、使用条件及び内容	

	<p>に開口部の位置</p>
<p>略軸組図</p>	<p>すべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の種類、配置及び寸法並びに開口部の位置</p>
<p>部材断面表</p>	<p>各階及びすべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の断面の形状、寸法及び仕様</p>
<p>荷重・外力計算書</p>	<p>固定荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに積載荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重（以下「特殊な荷重」という。）の数値及びその算出方法</p> <p>積雪荷重の数値及びその算出方法</p> <p>風圧力の数値及びその算出方法</p> <p>地震力の数値及びその算出方法</p> <p>プレストレスの数値及びその算出方法</p> <p>土圧、水圧その他考慮すべき荷重及び外力の数値及びその算出方法</p>
	<p>略伏図上に記載した特殊な荷重の分布</p>

<p>応力計算書（応力図及び基礎反力図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の数値及びその算出方法</p> <p>地震時（風圧力によつて生ずる力が地震力によつて生ずる力を上回る場合にあつては暴風時）における柱が負担するせん断力及びその分担率、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力及びその分担率</p> <p>平成十九年国土交通省告示第〇〇号第二に定める応力図及び同告示第三に定める基礎反力図に記載すべき事項</p>
<p>断面計算書（断面検定比図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の位置、部材に付す記号、部材断面の仕様、部材に生じる荷重の種類及び当該荷重が作用する方向</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの応力度</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの許容応力度</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の応力度と許容応力度の比率</p> <p>昭和五十八年建設省告示第千三百二十号（以下「告示」という。）第十三第二号口に規定する構造計算の計算書</p>

		(三)			
層間変形角計算結果一覧表		層間変形角計算書		使用上の支障に関する計算書	
層間変形角計算結果一覧表		層間変形角計算書		基礎ぐい等計算書	
<p>平成十九年国土交通省告示第〇〇号第五に定める断面検定比図に記載すべき事項</p>		<p>告示第十三第二号ハに規定する構造計算の計算書</p>		<p>告示第十五第二号に規定する構造計算の計算書（告示第十六に規定する構造計算を行った場合にあつては、省略することができるものとする。）</p>	
<p>損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容（層間変形角が二百分の一を超え百二十分の一以内である場合に限る。）</p>		<p>各階及び各方向の地震力による層間変形角の算出方法</p>		<p>告示第十三第二号ニに規定する構造計算の計算書</p>	
<p>各階及び各方向の地震力による層間変形角</p>		<p>地震力によって各階に生ずる水平方向の層間変位の算出方法</p>		<p>層間変位の計算に用いる地震力</p>	
<p>各階及び各方向の地震力による層間変形角</p>		<p>各階及び各方向の地震力による層間変位の算出方法</p>		<p>層間変位の計算に用いる地震力</p>	
<p>各階及び各方向の地震力による層間変形角</p>		<p>各階及び各方向の地震力による層間変位の算出方法</p>		<p>層間変位の計算に用いる地震力</p>	

(四)

保有水平耐力計算書

保有水平耐力計算結果一覧表

保有水平耐力計算に用いる地震力	各階及び各方向の保有水平耐力の算出方法	令第八十二条の三第二号に規定する各階の構造特性を表す D_s (以下この表において「 D_s 」という。)の算出方法	令第八十二条の三第二号に規定する各階の形状特性を表す F_{es} (以下この表において「 F_{es} 」という。)の算出方法	各階及び各方向の必要保有水平耐力の算出方法	構造耐力上主要な部分である柱、はり若しくは壁又はこれらの接合部について、局部座屈、せん断破壊等による構造耐力上支障のある急激な耐力の低下が生ずるおそれのないことについての検証内容	各階の保有水平耐力を増分解析により計算する場合における外力分布	架構の崩壊形	保有水平耐力、 D_s 、 F_{es} 及び必要保有水平耐力の数値	各階及び各方向の D_s の算定時における構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の分布及び塑性ヒンジの発生状況
-----------------	---------------------	--	--	-----------------------	---	---------------------------------	--------	--	--

				(五)			
屋根ふき材等計算書	応力計算書	荷重・外力計算書		使用構造材料一覧表			
告示第十七に規定する構造計算の計算書	法 屋根ふき材及び屋外に面する帳壁に生ずる力の数値及びその算出方法	風圧力の数値及びその算出方法	使用する指定建築材料が法第三十七条の認定を受けたものである場合にあっては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力度及び材料強度の数値並びに認定番号	使用する材料の許容応力度、許容耐力及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法	屋根ふき材、外装材及び屋外に面する帳壁に使用されるすべての材料の種別（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位	各階の保有水平耐力を増分解析により計算する場合において、建築物の各方向それぞれにおけるせん断力と層間変形角の関係	ある部材に生ずる力の分布及び塑性ヒンジの発生状況
						各階及び各方向の構造耐力上主要な部分である部材の部材群としての部材種別	各階及び各方向の保有水平耐力時における構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の分布及び塑性ヒンジの発生状況

別表二一

		(一)	
構造計算書の種類	別記第二号様式による構造計算概要書	構造計算チェックリスト	使用構造材料一覧表
明示すべき事項	別記第二号様式による構造計算概要書に記載すべき事項	プログラムによる構造計算を行う場合において、申請に係る建築物が、当該プログラムによる構造計算によって安全性を確かめることのできる建築物の構造の種類、規模その他のプログラムの使用条件に適合するかどうかを照合するための事項	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用されるすべての材料の種類（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位</p> <p>使用材料の許容応力度及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法</p> <p>法第三十七条の認定を受けた指定建築材料である場合にあつては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力度及び材料強度の数値並びに認定番号</p> <p>法第六十八条の二十六の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあつて</p>
特別な調査又は研究の結果等説明書			

<p>略伏図</p>	<p>(二) 基礎・地盤説明書（施行規則第 一条の三第一項表三中の規定に 基づく国土交通大臣の認定を受 けた場合で当該認定に係る認定 書の写しを添えた場合にあつて は、当該算出方法に係る図書の うち国土交通大臣の指定したも のを除く。）</p>							
<p>各階の構造耐力上主要な部分である部材の種別、配置及び寸法並びに開口部の位置</p>	<p>地盤の許容応力度、基礎及び基礎ぐいの許容支持力の数値並びにそれらの算出方法</p>	<p>構造計算において用いた支持層の位置、層の構成及び地盤調査の結果により設定した地盤の特性値</p>	<p>基礎の工法（地盤改良を含む。）の種別、位置、形状、寸法及び材料の種別</p>	<p>地下水位（地階を有しない建築物に直接基礎を用いた場合を除く。）</p>	<p>地層構成、支持地盤及び建築物（地下部分を含む。）の位置</p>	<p>地盤調査方法及びその結果</p>	<p>構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容</p>	<p>は、その認定番号、使用条件及び内容 特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合に あつては、その検討内容</p>

略軸組図	すべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の種別、配置及び寸法並びに開口部の位置
部材断面表	各階及びすべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の断面の形状、寸法及び仕様
荷重・外力計算書	<p>固定荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに積載荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重（以下「特殊な荷重」という。）の数値及びその算出方法</p> <p>積雪荷重の数値及びその算出方法</p> <p>風圧力の数値及びその算出方法</p> <p>地震力の数値及びその算出方法</p> <p>プレストレスの数値及びその算出方法</p> <p>土圧、水圧その他考慮すべき荷重及び外力の数値及びその算出方法</p> <p>略伏図上に記載した特殊な荷重の分布</p>

<p>応力計算書（応力図及び基礎反力図を含む。）（地下部分の計算を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の数値及びその算出方法</p> <p>地震時（風圧力によって生ずる力が地震力によって生ずる力を上回る場合にあつては暴風時）における柱が負担するせん断力及びその分担率、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力及びその分担率</p> <p>平成十九年国土交通省告示第〇〇号第二に定める応力図及び同告示第三に定める基礎反力図に記載すべき事項</p>
<p>断面計算書（断面検定比図を含む。）（地下部分の計算を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の位置、部材に付す記号、部材断面の仕様、部材に生じる荷重の種類及び当該荷重が作用する方向</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの応力度</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの許容応力度</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の応力度と許容応力度の比率</p> <p>昭和五十八年建設省告示第千三百二十号（以下「告示」という。）第十三第二号口に規定する構造計算の計算書</p>

		(三)			
表	損傷限界に関する計算結果一覧	損傷限界に関する計算書		積雪・暴風時耐力計算結果一覧	
		<p>各階及び各方向の損傷限界変位の数値及びその算出方法</p> <p>建築物の損傷限界固有周期の数値及びその算出方法</p> <p>建築物の損傷限界固有周期に応じて求めた地震時に作用する地震力の数値及びその算出方法</p> <p>表層地盤による加速度の増幅率Gsの数値及びその算出方法</p> <p>各階及び各方向の損傷限界耐力の数値及びその算出方法</p> <p>令第八十二条の五第三号ハに規定する地震力及び損傷限界耐力</p>		<p>平成十九年国土交通省告示第〇〇号第五に定める断面検定比図に記載すべき事項</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に生ずる力の数値及びその算出方法</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の耐力の数値及びその算出方法</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に生ずる力及び耐力並びにその比率</p>	
損傷限界変位の当該各階の高さに対する割合					

	<p>損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容（損傷限界変位の当該各階の高さに対する割合が二百分の一を超え百二十分の一以内である場合に限る。）</p>
<p>(四) 安全限界に関する計算書</p>	<p>各階及び各方向の安全限界変位の数値及びその算出方法</p> <p>建築物の安全限界固有周期の数値及びその算出方法</p> <p>建築物の安全限界固有周期に応じて求めた地震時に作用する地震力の数値及びその算出方法</p> <p>各階の安全限界変位の当該各階の高さに対する割合及びその算出方法</p> <p>表層地盤による加速度の増幅率Gsの数値及びその算出方法</p> <p>各階及び各方向の保有水平耐力の数値及びその算出方法</p> <p>構造耐力上主要な部分である柱、はり若しくは壁又はこれらの接合部について、局部座屈、せん断破壊等による構造耐力上支障のある急激な耐力の低下が生ずるおそれのないことについての検証内容</p>
<p>安全限界に関する計算結果一覧表</p>	<p>各階の保有水平耐力を増分解析により計算する場合における外力分布</p>

(五)								
基礎ぐい等計算書								
基礎ぐい、床版、小ばりその他の構造耐力上主要な部分である部材に関する構造計算の計算書	各階の保有水平耐力を増分解析により計算する場合において、建築物の各方向それぞれにおけるせん断力と層間変形角の関係	各階及び各方向の保有水平耐力時における構造耐力上主要な部分である部材に生ずる塑性ヒンジ及び変形の発生状況	各階及び各方向の安全限界変形時における構造耐力上主要な部分である部材に生ずる塑性ヒンジ及び変形の発生状況	各階及び各方向の安全限界変形時における構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の分布	令第八十二条の五第五号ハに規定する地震力及び保有水平耐力	表層地盤による加速度の増幅率Gsの数値を精算法で算出する場合にあつては、工学的基盤の条件	各階の安全限界変位の当該各階の高さに対する割合が七十五分の一（木造である階にあつては十分の一）を超える場合にあつては、建築物の各階が荷重及び外力に耐えることができることについての検証内容	各階の安全限界変位の当該各階の高さに対する割合

(六)	屋根ふき材等計算書	告示第十八第六に規定する構造計算の計算書
-----	-----------	----------------------

別表二

(一)	<p>別記第一号様式による構造計算概要書</p> <p>構造計算チェックリスト</p> <p>使用構造材料一覧表</p>	<p>明示すべき事項</p> <p>別記第一号様式による構造計算概要書に記載すべき事項</p> <p>プログラムによる構造計算を行う場合において、申請に係る建築物が、当該プログラムによる構造計算によって安全性を確かめることのできる建築物の構造の種類、規模その他のプログラムの使用条件に適合するかどうかを照合するための事項</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用されるすべての材料の種類（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位</p> <p>使用材料の許容応力度及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法</p> <p>建築基準法（昭和二十五年法律第二百一十号。以下「法」という。）第三十七条の認定を受けた指定建築材料である場合にあつては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力</p>
-----	--	--

		(二) 基礎・地盤説明書（施行規則第 一条の三第一項表三中の規定に 基づく国土交通大臣の認定を受 けた場合で当該認定に係る認定 書の写しを添えた場合にあつて は、当該算出方法に係る図書の うち国土交通大臣の指定したも のを除く。）	
<p>度及び材料強度の数値並びに認定番号</p>	<p>特別な調査又は研究の結果等説 明書</p> <p>法第六十八条の二十六の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた 構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあつて は、その認定番号、使用条件及び内容</p>	<p>特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合に あつては、その検討内容</p> <p>構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容</p> <p>地盤調査方法及びその結果</p> <p>地層構成、支持地盤及び建築物（地下部分を含む。）の位置</p> <p>地下水位（地階を有しない建築物に直接基礎を用いた場合を除く。）</p>	<p>基礎の工法（地盤改良を含む。）の種別、位置、形状、寸法及び材 料の種別</p> <p>構造計算において用いた支持層の位置、層の構成及び地盤調査の結 果により設定した地盤の特性値</p> <p>地盤の許容応力度、基礎及び基礎ぐいの許容支持力の数値並びにそ</p>

	これらの算出方法
略伏図	各階の構造耐力上主要な部分である部材の種類、配置及び寸法並びに開口部の位置
略軸組図	すべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の種類、配置及び寸法並びに開口部の位置
部材断面表	各階及びすべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の断面の形状、寸法及び仕様
荷重・外力計算書	固定荷重の数値及びその算出方法
	各階又は各部分の用途ごとに積載荷重の数値及びその算出方法
	各階又は各部分の用途ごとに大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重（以下「特殊な荷重」という。）の数値及びその算出方法
	積雪荷重の数値及びその算出方法
	風圧力の数値及びその算出方法
	地震力の数値及びその算出方法
	プレストレスの数値及びその算出方法

	<p>土圧、水圧その他考慮すべき荷重及び外力の数値及びその算出方法 略伏図上に記載した特殊な荷重の分布</p>
<p>応力計算書（応力図及び基礎反力図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の数値及びその算出方法 地震時（風圧力によって生ずる力が地震力によって生ずる力を上回る場合にあつては暴風時）における柱が負担するせん断力及びその分担率、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力及びその分担率 平成十九年国土交通省告示第〇〇号第二に定める応力図及び同告示第三に定める基礎反力図に記載すべき事項</p>
<p>断面計算書（断面検定比図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の位置、部材に付す記号、部材断面の仕様、部材に生じる荷重の種類及び当該荷重が作用する方向 構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの応力度 構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの許容応力度 構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の応力度と許容応力度の比率</p>

(四)			(三)			
剛性率・偏心率計算書	層間変形角計算結果一覧表		層間変形角計算書	使用上の支障に関する計算書	基礎ぐい等計算書	
各階及び各方向の剛性率を計算する場合における層間変形角の算定	損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容（層間変形角が二百分の一を超え百二十分の一以内である場合に限る。）	各階及び各方向の地震力による層間変形角	各階及び各方向の地震力による層間変形角の算出方法	地震力によって各階に生ずる水平方向の層間変位の算出方法	層間変位の計算に用いる地震力	告示第十三第二号ニに規定する構造計算の計算書
基礎ぐい、床版、小ばりその他の構造耐力上主要な部分である部材に関する構造計算の計算書	告示第十三第二号ハに規定する構造計算の計算書	平成十九年国土交通省告示第〇〇号第五に定める断面検定比図に記載すべき事項	昭和五十八年建設省告示第千三百二十号（以下「告示」という。）第十三第二号ロに規定する構造計算の計算書			

		(五)								
荷重・外力計算書		使用構造材料一覧表		剛性率・偏心率計算結果一覧表						
				に用いる層間変位の算出方法	各階及び各方向の剛性率の算出方法	各階の剛心周りのねじり剛性の算出方法	各階及び各方向の偏心率の算出方法	告示第十五第一号口に規定する構造計算の計算書	各階の剛性率及び偏心率	告示第十五第一号口に規定する構造計算の結果が適切であること

応力計算書	屋根ふき材及び屋外に面する帳壁に生ずる力の数値及びその算出方法
屋根ふき材等計算書	告示第十七に規定する構造計算の計算書

別表四

	明示すべき事項
<p>(一)</p> <p>別記第一号様式による構造計算概要書</p>	別記第一号様式による構造計算概要書に記載すべき事項
<p>構造計算チェックリスト</p>	<p>プログラムによる構造計算を行う場合において、申請に係る建築物が、当該プログラムによる構造計算によって安全性を確かめることのできる建築物の構造の種類、規模その他のプログラムの使用条件に適合するかどうかを照合するための事項</p>
<p>使用構造材料一覧表</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用されるすべての材料の種類（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位</p> <p>使用材料の許容応力度及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法</p> <p>建築基準法（昭和二十五年法律第二百一号。以下「法」という。）</p>

		(二)			
		<p>告示第十三及び第十七に規定する構造計算の適用</p>		<p>特別な調査又は研究の結果等説明書</p>	
<p>基礎・地盤説明書（施行規則第一条の三第一項表三中の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた場合で当該認定に係る認定書の写しを添えた場合にあつては、当該算出方法に係る図書のうち国土交通大臣の指定したものを除く。）</p>		<p>告示第十四各号に適合していることの検証内容</p>		<p>第三十七条の認定を受けた指定建築材料である場合にあつては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力度及び材料強度の数値並びに認定番号</p>	
<p>地盤調査方法及びその結果</p>		<p>特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合にあつては、その検討内容</p>		<p>法第六十八条の二十六の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあつては、その認定番号、使用条件及び内容</p>	
<p>地層構成、支持地盤及び建築物（地下部分を含む。）の位置</p>		<p>構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容</p>		<p>特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合にあつては、その検討内容</p>	
<p>地下水位（地階を有しない建築物に直接基礎を用いた場合を除く。）</p>		<p>告示第十四各号に適合していることの検証内容</p>		<p>特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合にあつては、その検討内容</p>	
<p>基礎の工法（地盤改良を含む。）の種別、位置、形状、寸法及び材料の種別</p>		<p>告示第十四各号に適合していることの検証内容</p>		<p>特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われている場合にあつては、その検討内容</p>	

	<p>構造計算において用いた支持層の位置、層の構成及び地盤調査の結果により設定した地盤の特性値</p> <p>地盤の許容応力度、基礎及び基礎ぐいの許容支持力の数値並びにそれらの算出方法</p>
略伏図	<p>各階の構造耐力上主要な部分である部材の種別、配置及び寸法並びに開口部の位置</p>
略軸組図	<p>すべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の種別、配置及び寸法並びに開口部の位置</p>
部材断面表	<p>各階及びすべての通りの構造耐力上主要な部分である部材の断面の形状、寸法及び仕様</p>
荷重・外力計算書	<p>固定荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに積載荷重の数値及びその算出方法</p> <p>各階又は各部分の用途ごとに大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重（以下「特殊な荷重」という。）の数値及びその算出方法</p> <p>積雪荷重の数値及びその算出方法</p>
風圧力の数値及びその算出方法	

	<p>地震力の数値及びその算出方法</p> <p>プレストレスの数値及びその算出方法</p> <p>土圧、水圧その他考慮すべき荷重及び外力の数値及びその算出方法</p> <p>略伏図上に記載した特殊な荷重の分布</p>
<p>応力計算書（応力図及び基礎反力図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材に生ずる力の数値及びその算出方法</p> <p>地震時（風圧力によつて生ずる力が地震力によつて生ずる力を上回る場合にあつては暴風時）における柱が負担するせん断力及びその分担率、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力及びその分担率</p> <p>平成十九年国土交通省告示第〇〇号第二に定める応力図及び同告示第三に定める基礎反力図に記載すべき事項</p>
<p>断面計算書（断面検定比図を含む。）</p>	<p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の位置、部材に付す記号、部材断面の仕様、部材に生じる荷重の種類及び当該荷重が作用する方向</p> <p>構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの応力度</p>

(三)						
使用構造材料一覧表	使用上の支障に関する計算書	基礎ぐい等計算書	基礎ぐい、床版、小ぶりその他の構造耐力上主要な部分である部材に関する構造計算の計算書	告示第十三第二号ハに規定する構造計算の計算書	平成十九年国土交通省告示第〇〇号第五に定める断面検定比図に記載すべき事項	昭和五十八年建設省告示第千三百二十号（以下「告示」という。）第十三第二号ロに規定する構造計算の計算書
使用する材料の許容応力度、許容耐力及び材料強度の数値並びにそれらの算出方法	使用する指定建築材料が法第三十七条の認定を受けたものである場	告示第十三第二号ニに規定する構造計算の計算書	屋根ふき材、外装材及び屋外に面する帳壁に使用されるすべての材料の種別（規格がある場合にあつては当該規格）及び使用部位	構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の軸方向、曲げ及びせん断それぞれの許容応力度	構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）の応力度と許容応力度の比率	昭和五十八年建設省告示第千三百二十号（以下「告示」という。）第十三第二号ロに規定する構造計算の計算書

<p>荷重・外力計算書</p>	<p>合にあつては、その使用位置、形状及び寸法、当該構造計算において用いた許容応力度及び材料強度の数値並びに認定番号</p>
<p>応力計算書</p>	<p>風圧力の数値及びその算出方法</p>
<p>屋根ふき材等計算書</p>	<p>法 屋根ふき材及び屋外に面する帳壁に生ずる力の数値及びその算出方法</p>
<p>告示第十七に規定する構造計算の計算書</p>	

【8. 適用する構造計算】

【イ. 適用する構造計算の種類】

- 昭和58年国土交通省告示第1320号（以下「告示」という。）第13、第14、第15第2号及び第17に規定する構造計算
- 告示第13、第14、第16及び第17に規定する構造計算
- 告示第13、第14、第15第1号及び第17に規定する構造計算
- 告示第13及び第17に規定する構造計算

【ロ. 告示第14第各号の基準に適合していることの検証内容】（参照頁 ）

【9. 使用プログラムの概要】

【イ. プログラムの名称】

【ロ. 国土交通大臣の認定の有無】 有 ・ 無

【ハ. 認定番号】

【ニ. 認定の取得年月日】

【ホ. 構造計算チェックリスト】（参照頁 ）

【10. 使用する材料と部位】（参照頁 ）

材 料	設計基準強度 又は品質	使用部位	認定の有無	備 考

【11. 使用する材料の許容応力度等】（参照頁 ）

(1) コンクリート及びグラウトの許容応力度

種 類	長期に生ずる力に対する許容応力度(単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				プレストレス導入時の許容応力度(単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)			断面耐力算定用の材料強度(単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)	備 考
	圧縮	せん断	付着		圧縮	せん断	付着		
			上端筋	その他の鉄筋					

(2) 鉄筋の許容応力度

種類	長期に生ずる力に対する許容 応力度（単位 一平方ミリメ ートルにつきニュートン）			短期に生ずる力に対する許容 応力度（単位 一平方ミリメ ートルにつきニュートン）			基準強度 （単位 一 平方ミリメ ートルにつ きニュート ン）	備考
	圧縮	引張り	せん断	圧縮	引張り	せん断		

(3) 鋼材の許容応力度

種類	長期に生ずる力に対する許容 応力度（単位 一平方ミリメ ートルにつきニュートン）				短期に生ずる力に対する許容 応力度（単位 一平方ミリメ ートルにつきニュートン）				基準強度 （単位 一 平方ミリメ ートルにつ きニュート ン）	備考
	圧縮	引張り	曲げ	せん断	圧縮	引張り	曲げ	せん断		

(4) 緊張材の引張りの許容応力度

材 料	規格・ 種類等	長期に生ずる力に 対する許容応力度 （単位 一平方ミ リメートルにつ きニュートン）	短期に生ずる力に 対する許容応力度 （単位 一平方ミ リメートルにつ きニュートン）	引張強さ（単 位 一平方 ミリメー トルにつ きニュー トン）	耐力（単位 一平方ミ リメー トルにつ きニュー トン）	備考

【12. 地盤・基礎説明書】（参照頁 ）

【13. 略伏図等】（参照頁 ）

【14. 略軸組図等】 (参照頁)

【15. 部材断面表】 (参照頁)

【16. 特別な調査又は研究の結果等説明書】 (参照頁)

§2 荷重・外力等

【1. 固定荷重】 (参照頁)

【2. 積載荷重】 (参照頁)

【3. 積雪荷重】 (参照頁)

【イ. 垂直積雪量】 c m

【ロ. 単位荷重】 N / (m² · c m)

【ハ. 積雪荷重の低減】 有 ・ 無

【ニ. 特定行政庁で定める規則】

【4. 風圧力】 (参照頁)

【イ. 地表面粗度区分】 I II III IV

【ロ. 基準風速】 V₀ = m / 秒

【ハ. Eの数值】 E = E_r² · Gf =

【ニ. 速度圧】 q = 0.6 E V₀² = N / m²

【ホ. 風力係数】 C_f =

【5. 地震力】 (参照頁)

【イ. 地震地域係数】 Z =

【ロ. 地盤種別】

【ハ. 設計用一次固有周期】

【ニ. 設計用一次固有周期の算出方法】 略算法 精算法

【ホ. 振動特性係数】 $R_t =$

【ヘ. 標準せん断力係数】 $C_0 =$

【ト. 地下部分の水平震度】

【チ. 地震力 (概要)】

方向	階	w _i (単位 キロ ニュートン)	Σw _i (単位 キ ロニュートン)	α _i	A _i	C _i	Q _i (単位 キロ ニュートン)	備考

【6. プレストレス】 (参照頁)

材料	階	プレストレス導入部位	緊張材に一本当たりプレ ストレス量	備考

【7. 荷重分布図】 (参照頁)

【8. その他の荷重・外力】

【イ. 土圧に対する考慮】 (参照頁)

【ロ. 水圧に対する考慮】 (参照頁)

【ハ. その他考慮すべき荷重・外力に対する考慮】 (参照頁)

§ 3 応力計算

【1. 架構モデル図】 (参照頁)

【2. 鉛直荷重時応力 (長期)】 (参照頁)

【3. プレストレス導入時応力】 (参照頁)

【4. 鉛直荷重時応力 (破壊に対する断面耐力の検討関係)】 (参照頁)

【5. 水平荷重時応力 (破壊に対する断面耐力の検討関係)】 (参照頁)

【6. 水平力分担】 (参照頁)

方向	階	ΣQ _c (単 位 キロ	ΣQ _w (単 位 キロ	ΣQ _c + ΣQ _w (単位 キ	設計用分担率 (単位 パー セント)

		ニュートン)	ニュートン)	ロニュートン)	$\frac{\sum Q_w}{\sum Q_c + \sum Q_w}$	柱の分担率	耐力壁又は筋かいの分担率

【7. 基礎反力図】 (参照頁)

§ 4 断面計算

【1. 断面検定表】 (参照頁)

【2. 長期荷重時断面検定比図】 (参照頁)

【3. プレストレス導入時断面検定比図】 (参照頁)

【4. 破壊に対する断面耐力の検討】

【イ. 告示第13 第二号ハ関係】 (参照頁)

【ロ. 告示第15 第二号イ関係】 (参照頁)

§ 5 基礎ぐい等の検討 (参照頁)

§ 6 使用上の支障に関する検討 (参照頁)

§ 7 層間変形角、剛性率、偏心率等

【1. 層間変形角・剛性率】 (参照頁)

方向	階	階高 (単位ミリメートル)	最大の層間変位 (単位ミリメートル)	最大の層間変形角	剛性率を計算する場合の層間変位 (単位ミリメートル)	剛性率を計算する場合の層間変形角	剛性率	F _s

各階の剛性率 ≥ 0.6

【2. 損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容】 (参照頁)

【3. 偏心率】 (参照頁)

方向	階	加力方向	重心	剛心	re	e	偏心率	Fe
----	---	------	----	----	----	---	-----	----

§ 9 屋根ふき材等の検討 (参照頁)

(注意事項)

1. 共通事項

- ①建築物の2以上の部分がエキスパンションジョイントその他の相互に応力を伝えない構造方法のみで接している場合にあつては、本構造計算概要書を当該建築物の部分ごとに作成してください。
- ②本構造計算概要書中に、記入欄あるいは表がある場合には、当該部分に必ず記入してください。また、建築物の規模等に応じて記入欄あるいは表は、その大きさを調整してください。
- ③「(参照頁)」欄がある場合には、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。該当する参照頁が複数存在する場合にあつては、それぞれの対応関係が分かるように記入してください。
- ④構造計算に当たり規定の適用を受けない項目、あるいは構造種別等の構造上特徴から特に記入が不要と判断される項目については、記入する必要はありません。ただし、この場合においては、その旨が分かるよう理由を明記してください。
- ⑤数字は算用数字を用いてください。

2. 「§1 建築物の概要」関係

- ①8欄イは、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。
- ③8欄ロは、告示第13及び第17に規定する構造計算を選択した場合において、告示第14各号の基準に適合していることの検証内容について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。
- ③9欄は、複数のプログラムを使用した場合は、すべてのプログラムについて記入してください。
- ④9欄の「プログラムの名称」は、当該プログラムのバージョン番号も含めて記入してください。
- ⑤9欄の「構造計算チェックリスト」とは、建築基準法施行規則第1条の3第1項の表3に定める構造計算チェックリストであり、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。
- ⑥10欄については、表に構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用される主要な材料を記入してください。この場合において、材料の種類に応じて、表に必要な項目を追加あるいは変更等をしてください。
- ⑦10欄の「認定の有無」は、法第37条の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた建築材料である場合にあつて認定番号を記入し、「備考」は、必要に応じて記入してください。ただし、主たる構造を木造とする場合には、備考には製材の含水率、集成材の構成等を記入してください。
- ⑧11欄については、構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用される他の主要な材料については、11欄中の(1)から(4)までの表に準じて作成してください。また、「備考」は、必要に応じて記入してください。
- ⑨13欄は、基準階の略伏図又はこれに代わる構造計算における架構の様相を示した図

(以下「略伏図等」という。)を図示してください。その他の階の略伏図等については、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。この場合において、構造計算に当たって用いた構造耐力上主要な部分である部材の配置を確認できるよう図示するとともに、構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と、他の図面に付した符号との対応関係を明記してください。

⑩14 欄は、代表的な通りの略軸組図又はこれに代わる構造計算における架構の様相を示した図(以下「略軸組図等」という。)を図示してください。その他の通りの略軸組図等については、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。この場合において、構造計算に当たって用いた構造耐力上主要な部分である部材の配置を確認できるよう図示するとともに、構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と、他の図面に付した符号との対応関係を明記してください。

⑪15 欄は、略伏図等及び略軸組図等に付す構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と部材断面表に付す符号とを整合させてください。

⑫16 欄は、法第 68 条の 26 の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあつては、それらの構造方法等を記入してください。また、それらの構造方法等の使用条件及び内容を示した資料を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

⑬16 欄は、特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われた場合にあつては、その検討内容を示した資料及び構造計算書を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

⑭16 欄は、構造計算の結果に異常値が無いことを確認する場合、構造計算において複数の仮定が考えられる場合等において、構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容を示した資料を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

3. 「§ 2 荷重・外力等」関係

① 2 欄は、建築物の各階又は各部分の用途と、これに対応する積載荷重を記入するとともに、大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重(以下「特殊荷重」という。)が生じる場合にあつては、当該荷重の根拠を記入してください。

② 4 欄の「地表面粗度区分」は、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。

③ 5 欄の「設計用一次固有周期の算出方法」は、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。

④ 5 欄のうち、設計用一次固有周期、振動特性係数及び標準せん断力係数は、計算する方向別に記入してください。

⑤ 5 欄の「地震力(概要)」の表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) w_i は、 i 階の固定荷重と積載荷重の和(令第 86 条第 2 項ただし書の規定により特性行政庁が指定する多雪区域においては、更に積雪荷重を加えるものとする。)(以下「常時荷重」という。)とする。

ロ) $\sum w_i$ は、 i 階から上の階に生ずる常時荷重の和とする。

ハ) α_i は、当該建築物に生ずるすべての常時荷重の和に対する i 階から上の階に生

ずる常時荷重の和の比とする。

ニ) A_i は、地震層せん断力係数の高さ方向の分布係数とする。

ホ) C_i は、地震層せん断力係数とする。

へ) Q_i は、 i 階に生ずる地震力の数値とする。

⑥ 7 欄は、特殊荷重の分布を略伏図等上に記入してください。

4. 「§ 3 応力計算」関係

① 1 欄の架構モデル図には、架構の支持条件、接合条件、剛域とした部分、耐力壁や筋かいの構造計算における様相、部材の剛性低下率その他必要な事項を略伏図等又は略軸組図等若しくはその模式図上に記入してください。なお、同一の図に図示することが困難な場合には、それぞれ分けて記入してください。

② 2 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した応力図について、3 欄から 5 欄までは、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に準じて作成した応力図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

③ 6 欄の表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) Q_c は、柱が負担するせん断力とする。

ロ) Q_w は、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力とする。

④ 7 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した基礎反力図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

5. 「§ 4 断面計算」関係

① 1 欄の断面検定表の記載の考え方を示した資料を必ず添付してください。

② 1 欄の断面検定表には、原則として別表に掲げる項目を記載することとしますが、必要に応じて追加あるいは変更等を行うことができることとします。また、項目に付す記号については、それぞれ明確に定義すれば表の記号によらないことができます。

③ 2 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した断面検定比図について、3 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に準じて作成した断面検定比図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

④ 4 欄は、破壊に対する断面耐力の検討について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

6. 「§ 7 層間変形角、剛性率、偏心率等」関係

① 1 欄の表中の F_s は、昭和 55 年建設省告示第 1792 号第 6 に規定する F_s の数値とします。

② 1 欄外の「各階の剛性率 ≥ 0.6 」は、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。

③ 2 欄は、層間変形角が 200 分の 1 を超え 120 分の 1 以内である場合にあっては、損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容を記載した資料を添付し、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

④ 3 欄の表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) r_e は、令第 82 条の 6 第 2 号ロに規定する r_e の数値とする。

ロ) e は、令第 82 条の 6 第 2 号ロに規定する e の数値とする。

ハ) F_e は、昭和 55 年建設省告示第 1792 号第 6 に規定する F_e の数値とする。

⑤ 3 欄外の「各階の偏心率 ≤ 0.15 」は、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。

⑥ 告示第 15 第 1 号ロの基準に適合していることの検証内容について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

7. 「§ 8 保有水平耐力」関係

① 2 欄の「 D_s 算定時の応力図」及び 5 欄の「保有水平耐力時の応力図」は、略軸組図等に D_s 算定時及び保有水平耐力時の曲げモーメント図を記載した上で、各階及び各方向の D_s 算定時及び保有水平耐力時における各部材の軸方向力、曲げモーメント及びせん断力の数値を記入してください。

② 3 欄の「塑性ヒンジ図 (D_s 算定時)」及び 6 欄の「塑性ヒンジ図 (保有水平耐力時)」は、略軸組図等又はその模式図上において、各階及び各方向の D_s 算定時及び保有水平耐力時における塑性ヒンジの発生状況を図示してください。また、せん断破壊、引張又は圧縮破壊した部材等がある場合にあっては、これらの破壊状況を図示してください。

③ 4 欄は、各階及び各方向の構造耐力上主要な部分である部材及び部材群としての部材種別について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

④ 7 欄の「各階の層せん断力変形角曲線」は、各階の保有水平耐力を増分解析により計算する場合においては、建築物の各方向それぞれにおけるせん断力と層間変形角又は層間変位の関係を図示してください。

⑤ 8 欄の表中の β_u は、耐力壁の部材群又は筋かいの部材群の負担率を表すものとします。

⑥ 9 欄上段の「保有水平耐力とした時点」には、構造計算において保有水平耐力とした時点を具体的に記入してください。

別記第〇号様式

構造計算概要書

(プレストレストコンクリート造の建築物 (限界耐力計算))

§ 1 建築物の概要

- 【1. 建築物の名称】 (参照頁)
- 【2. 構造計算を行った者】 (参照頁)
 - 【イ. 資格】 () 建築士 () 登録第 号
 - 【ロ. 氏名】
 - 【ハ. 建築士事務所】 () 建築士事務所 () 知事登録 号
 - 【ニ. 郵便番号】
 - 【ホ. 所在地】
 - 【ヘ. 電話番号】
- 【3. 建築場所】 (参照頁)
- 【4. 主要用途】 (参照頁)
- 【5. 規模】 (参照頁)
 - 【イ. 延べ面積】 m²
 - 【ロ. 建築面積】 m²
 - 【ハ. 構造】 造 一部 造
 - 【ニ. 階数】 地上 階 地下 階 塔屋 階
 - 【ホ. 高さ】 m
 - 【ヘ. 軒の高さ】 m
 - 【ト. 基礎の底部の深さ】 m
- 【6. 構造上の特徴】
- 【7. 構造計算方針】

【8. 使用プログラムの概要】

【イ. プログラムの名称】

【ロ. 国土交通大臣の認定の有無】 有 ・ 無

【ハ. 認定番号】

【ニ. 認定の取得年月日】

【ホ. 構造計算チェックリスト】 (参照頁)

【9. 使用する材料と部位】

(1) 木材以外の場合

材 料	設計基準強度 又は品質	使用部位	認定の有無	備 考

(2) 木材の場合 (集成材、単板積層材等の木質材料を含む。)

材 料	規 格	等 級	樹 種	使用部位	備 考

【10. 使用する材料の許容応力度等】

(1) コンクリート及びグラウトの許容応力度

種 類	長期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				プレストレス導入時の許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)			断面耐力算定用の材料強度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)	備 考
	圧縮	せん断	付着		圧縮	せん断	付着		
			上端筋	その他の鉄筋					

(2) 鉄筋の許容応力度

種類	長期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)			短期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)			基準強度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)	備考
	圧縮	引張り	せん断	圧縮	引張り	せん断		

(3) 木材の許容応力度 (集成材、単板積層材等の木質材料を含む。)

材料	規格・樹種等	長期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				短期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				基準強度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				備考	
		圧縮	曲げ	せん断	めり込み	圧縮	曲げ	せん断	めり込み	圧縮	曲げ	せん断	めり込み		

(4) 鋼材の許容応力度

種類	長期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				短期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)				基準強度 (単位 一平方ミリメートルにつきニュートン)	備考
	圧縮	引張り	曲げ	せん断	圧縮	引張り	曲げ	せん断		

(5) 緊張材の引張りの許容応力度

材料	規格・種類等	長期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつき)	短期に生ずる力に対する許容応力度 (単位 一平方ミリメートルにつき)	引張強さ (単位 一平方ミリメートルにつきニ)	耐力 (単位 一平方ミリメートルにつきニュー)	備考

		ニュートン)	ニュートン)	ユートン)	トン)	

【1 1. 地盤・基礎説明書】 (参照頁)

【1 2. 略伏図等】 (参照頁)

【1 3. 略軸組図等】 (参照頁)

【1 4. 部材断面表】 (参照頁)

【1 5. 特別な調査又は研究の結果等説明書】 (参照頁)

§ 2 荷重・外力等

【1. 固定荷重】 (参照頁)

【2. 積載荷重】 (参照頁)

【3. 積雪荷重】 (参照頁)

- 【イ. 垂直積雪量】 c m
- 【ロ. 単位荷重】 N / (m² · c m)
- 【ハ. 積雪荷重の低減】 有 ・ 無
- 【ニ. 特定行政庁で定める規則】

【4. 風圧力】 (参照頁)

- 【イ. 地表面粗度区分】 I II III IV
- 【ロ. 基準風速】 V₀ = m / 秒
- 【ハ. E の数値】 E = E_r² · G_f =
- 【ニ. 速度圧】 q = 0.6 E V₀² = N / m²
- 【ホ. 風力係数】 C_f =

【5. 地震力】

【5. 1 地震力 (令第 82 条の 5 第 3 号関係)】 (参照頁)

【イ. 地震地域係数】

Z =

【ロ. 表層地盤における加速度の増幅率 G_s の数値 (地盤種別)】

G_s = (第 種地盤)

【ハ. 損傷限界固有周期 T_d】

T_d = 秒

【ニ. 工学的基盤における加速度応答 S₀】

S₀ = m / s²

【ホ. 有効質量比 Mu_d / Σmi、係数 p 及び q】

Mu_d / Σmi = p = q =

【ヘ. (地上部分の) 最下階の層せん断力係数】

CB (= Q_d_i / Σwi) =

【ト. 地震力 (概要)】

方 向	階	mi (単位 トン)	Bdi	Z G _s S ₀ (単位 メートル毎秒毎秒)	Pdi (単位 キロニュートン)	Qdi (単位 キロニュートン)

【5. 2 地震力 (令第 82 条の 5 第 5 号関係)】 (参照頁)

【イ. 地震地域係数】

Z =

【ロ. 表層地盤における加速度の増幅率 G_s の数値 (地盤種別)】

G_s = (第 種地盤)

【ハ. 安全限界固有周期 T_s 】

$T_s =$ 秒

【ニ. 工学的基盤における加速度応答 S_0 】

$S_0 =$ m/s^2

【ホ. 有効質量比 $Mu_s/\sum mi$ 、係数 p 及び q 】

$Mu_s/\sum mi =$ $p =$ $q =$

【ヘ. 加速度の低減率 F_h 、建築物の減衰性を表す数値 h 】

$F_h =$ $h =$

【ト. (地上部分の) 最下階の層せん断力係数】

$CB (= Q_{s_i}/\sum w_i) =$

【チ. 地震力 (概要)】

方向	階	m_i (単位 トン)	B_{s_i}	$F_h Z G_s S_0$ (単位 メートル毎秒毎秒)	P_{s_i} (単位 キロニュートン)	Q_{s_i} (単位 キロニュートン)

【6. プレストレス】 (参照頁)

材料	階	プレストレス導入部位	緊張材に一本当たりプレストレス量	備考

【7. 荷重分布図】 (参照頁)

【8. 地盤の増幅】

【8. 1. 地盤調査の概要】 (参照頁)

【イ. 地盤調査の位置】

【ロ. 地盤調査の概要】

【ハ. 工学的基盤の傾斜】 傾斜 度

【ニ. 液状化のおそれの有無】

中規模な地震時 : 有 (液状化の程度) 無

大規模な地震時 : 有 (液状化の程度) 無

【8. 2. 地盤調査結果】 (参照頁)

【イ. 工学的基盤の深さ】

$H_0 =$ m

【ロ. 表層地盤の一次卓越周期 T_1 】

$$T_1 = \quad \text{秒}$$

【ハ. 表層地盤の二次卓越周期 T_2 】

$$T_2 = \quad \text{秒}$$

【ニ. 安全限界固有周期】

$$T_s = \quad \text{秒}$$

【ホ. 表層地盤の一次固有周期に対する増幅率 G_{S1} 】

$$G_{S1} =$$

【ヘ. 表層地盤の二次固有周期に対する増幅率 G_{S2} 】

$$G_{S2} =$$

【ト. 相互作用に関する係数 β 】

$$\beta =$$

【チ. 表層地盤における加速度の増幅率 G_s 】

$$G_s = \quad (= \quad \times \beta)$$

【リ. 地盤調査結果一覧表】 (参照頁)

深 度 (単位 メー トル)	層 厚 (単位 メー トル)	Vsi (単 位 メ ー トル 毎秒)	ρ_i (単 位 ー 立 方メ ー トル につ き トン)	ui (単 位 メ ー ト ル)	δu_i (単 位 ー メー トル)	せん断剛性 Gi (単位 ー 平方メー トルにつ き キロニュー トン)	減 衰 定 数 hi	改良の有無 (記載例) ○ 350(200)

【ヌ. 加速度応答スペクトル図】 (参照頁)

【9. その他の荷重・外力】

【イ. 土圧に対する考慮】 (参照頁)

【ロ. 水圧に対する考慮】 (参照頁)

【ハ. その他考慮すべき荷重・外力に対する考慮】 (参照頁)

§ 3 応力計算

【1. 架構モデル図】 (参照頁)

【2. 鉛直荷重時応力 (長期)】 (参照頁)

【3. プレストレス導入時応力】 (参照頁)

【4. 鉛直荷重時応力 (破壊に対する断面耐力の検討関係)】 (参照頁)

【5. 水平荷重時応力（破壊に対する断面耐力の検討関係）】（参照頁 ）

【6. 水平力分担】

(1) 木造以外の場合（参照頁 ）

方向	階	ΣQ_c (単位 キロニュートン)	ΣQ_w (単位 キロニュートン)	$\Sigma Q_c + \Sigma Q_w$ (単位 キロニュートン)	$\frac{\Sigma Q_w}{\Sigma Q_c + \Sigma Q_w}$	設計用分担率 (単位 パーセント)	
						柱の分担率	耐力壁又は筋かいの分担率

(2) 木造の場合（参照頁 ）

方向	階	加力方向	通り	必要耐力 (単位 キロニュートン)		許容せん断耐力 (単位 キロニュートン)
				地震力	風圧力	

(3) 木造における壁量の確認（参照頁 ）

方向	階	床面積 (単位 平方メートル)	見付面積 (単位 平方メートル)	必要壁量 (単位 メートル)		存在壁量 (単位 メートル)
				地震力	風圧力	

【7. 基礎反力図】（参照頁 ）

§ 4 断面計算

【1. 断面検定表】（参照頁 ）

【2. 長期荷重時断面検定比図】（参照頁 ）

【3. プレストレス導入時断面検定比図 (損傷限界時)】（参照頁 ）

§ 5 損傷限界変位・安全限界変位等

【1. 損傷限界変位等】 (参照頁)

【イ. 有効質量 Mu_d 】

$$Mu_d = \quad t$$

【ロ. 代表変位 Δd 】

$$\Delta d = \quad m$$

【ハ. 代表高さ H】

$$H = \quad m$$

【ニ. 損傷限界耐力】

$$Qd = \quad kN$$

【ホ. 周期調整係数 r】

$$r =$$

【ヘ. 損傷限界固有周期 Td 】

$$Td = \quad (= \quad \times r)$$

【ト. 損傷限界変位等】 (参照頁)

方向	階	m_i (単位 トン)	δd_i (単位 メートル)	δi (単位 メー ト ル)	h_i (単位 メー ト ル)	層間変 形角	$m_i \times \delta d_i$	$m_i \times \delta d_i^2$

$$\Sigma m_i \times \delta d_i = \quad \Sigma m_i \times \delta d_i^2 =$$

【2. 損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容】 (参照頁)

【3. 安全限界変位等】 (参照頁)

【イ. 有効質量 Mu_s 】

$$Mu_s =$$

【ロ. 代表変位 Δs 】

$$\Delta s = \quad m$$

【ハ. 代表高さ H】

$$H = \quad m$$

【ニ. 安全限界耐力】

$$Qs = \quad kN$$

【ホ. 周期調整係数 r】

$$r =$$

【ヘ. 安全限界固有周期 Ts 】

$$Ts = \quad (= \quad \times r)$$

【ト. 建築物の塑性の程度を表す係数 Df 及び選択した計算法】

$$Df =$$

□ 第一号 ・ □ 第二号 ・ □ 第三号

【チ. 安全限界変位等】 (参照頁)

方向	階	mi (単位 トン)	δsi (単位 メートル)	δi (単位 メー ト ル)	hi (単位 メー ト ル)	層間変 形角(安 全限界 時)	$mi \times \delta si$	$mi \times \delta si^2$

$$\sum mi \times \delta si = \sum mi \times \delta si^2 =$$

【4. 安全限界変形角が基準値を超える場合についての検証内容】 (参照頁)

【5. 損傷限界耐力及び安全限界耐力】 (参照頁)

方向	階	Qdi (単 位 キ ロニュ ート ン)	建築物の 損傷限界 時の各階 の耐力(単 位 キロ ニュート ン)	損傷限 界耐力 (単位 キロニ ュート ン)	判定1 (比率)	Qsi (単 位 キ ロニュ ート ン)	建築物の 安全限界 時の各階 耐力(単 位 キロ ニュート ン)	保有水 平耐力 (単位 キロニ ュート ン)	判定2 (比率)

【6. 建築物の地震に対する性能を示した曲線】 (参照頁)

§ 6 保有水平耐力等

【1. 保有水平耐力・安全限界変位を計算する場合の外力分布】 (参照頁)

【2. 安全限界変形時の応力図】 (参照頁)

【3. 塑性ヒンジ・変形図 (安全限界変形時)】 (参照頁)

【4. 塑性ヒンジ・変形図 (保有水平耐力時)】 (参照頁)

【5. 各階の層せん断力変形角曲線】 (参照頁)

【6. 保有水平耐力算定表】 (参照頁)

保有水平耐力の計算は、下記の時点をもつて保有耐力とした。

() 方向： 時点（代表変形 1 / ）
() 方向： 時点（代表変形 1 / ）

§ 7 基礎ぐい等の検討（参照頁 ）

§ 8 使用上の支障に関する検討（参照頁 ）

§ 9 屋根ふき材等の検討（参照頁 ）

(注意事項)

1. 共通事項

- ①建築物の2以上の部分がエキスパンションジョイントその他の相互に応力を伝えない構造方法のみで接している場合にあつては、本構造計算概要書を当該建築物の部分ごとに作成してください。
- ②本構造計算概要書中に、記入欄あるいは表がある場合には、当該部分に必ず記入してください。また、建築物の規模等に応じて記入欄あるいは表の大きさを調整してください。
- ③「(参照頁)」欄がある場合には、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。該当する参照頁が複数存在する場合にあつては、それぞれの対応関係が分かるように記入してください。
- ④構造計算に当たり規定の適用を受けない項目、あるいは構造種別等の構造上特徴から特に記入が不要と判断される項目については、記入する必要はありません。ただし、この場合においては、その旨が分かるよう理由を明記してください。
- ⑤数字は算用数字を用いてください。

2. 「§1 建築物の概要」関係

- ①8欄は、複数のプログラムを使用した場合は、すべてのプログラムについて記入してください。
- ②8欄の「プログラムの名称」は、当該プログラムのバージョン番号も含めて記入してください。
- ③8欄の「構造計算チェックリスト」とは、建築基準法施行規則第1条の3第1項の表3に定める構造計算チェックリストであり、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。
- ④9欄については、表に構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用される主要な材料を記入してください。この場合において、材料の種類に応じて、表に必要な項目を追加あるいは変更等をしてください。
- ⑤9欄の「認定の有無」は、法第37条の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた建築材料である場合にあつて認定番号を記入し、「備考」は、必要に応じて記入してください。ただし、主たる構造を木造とする場合には、備考には製材の含水率、集成材の構成等を記入してください。
- ⑥10欄については、構造耐力上主要な部分である部材（接合部を含む。）に使用される他の主要な材料については、11欄中の(1)から(5)までの表に準じて作成してください。また、「備考」は、必要に応じて記入してください。
- ⑦12欄は、基準階の略伏図又はこれに代わる構造計算における架構の様相を示した図（以下「略伏図等」という。）を図示してください。その他の階の略伏図等については、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。この場合において、構造計算に当たって用いた構造耐力上主要な部分である部材の配置を確認できるように図示するとともに、構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と、他の図面に付した符号との対応関係を明記してください。

- ⑧13 欄は、代表的な通りの略軸組図又はこれに代わる構造計算における架構の様相を示した図（以下「略軸組図等」という。）を図示してください。その他の通りの略軸組図等については、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。この場合において、構造計算に当たって用いた構造耐力上主要な部分である部材の配置を確認できるように図示するとともに、構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と、他の図面に付した符号との対応関係を明記してください。
- ⑨14 欄は、略伏図等及び略軸組図等に付す構造耐力上主要な部分である部材を識別する符号と部材断面表に付す符号とを整合させてください。
- ⑩15 欄は、法第 68 条の 26 の規定に基づく国土交通大臣の認定を受けた構造方法等その他特殊な構造方法等が使用されている場合にあっては、それらの構造方法等を記入してください。また、それらの構造方法等の使用条件及び内容を示した資料を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。
- ⑪15 欄は、特別な調査又は研究の結果に基づき構造計算が行われた場合にあっては、その検討内容を示した資料及び構造計算書を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。
- ⑫15 欄は、構造計算の結果に異常値が無いことを確認する場合、構造計算において複数の仮定が考えられる場合等において、構造計算の仮定及び計算結果の適切性に関する検討内容を示した資料を添付することとし、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

3. 「§ 2 荷重・外力等」関係

- ① 2 欄は、建築物の各階又は各部分の用途と、これに対応する積載荷重を記入するとともに、大規模な設備、塔屋その他の特殊な荷重（以下「特殊荷重」という。）が生じる場合にあっては、当該荷重の根拠を記入してください。
- ② 4 欄の「地表面粗度区分」は、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。
- ③ 5. 1 欄の損傷限界固有周期、工学的基盤における加速度応答、有効質量比 $Mu_d / \Sigma mi$ 、係数 p 、 q 及び最下階の層せん断力係数は、計算する方向別に記入してください。
- ④ 5. 1 欄中の項目は、それぞれ次のとおりです。
- イ) mi は、 i 階の固定荷重と積載荷重の和（令第 86 条第 2 項ただし書の規定により特性行政庁が指定する多雪区域においては、更に積雪荷重を加えるものとする。）（以下「常時荷重」という。）に相当する質量とする。
 - ロ) Mu_d は、建築物の有効質量とする。
 - ハ) p は、平成 12 年建設省告示第 1457 号第 4 に規定する p とする。
 - ニ) q は、平成 12 年建設省告示第 1457 号第 4 に規定する q とする。
 - ホ) Qd_i は、 i 階に生ずる地震力の数値とする。
 - ヘ) wi は、 i 階の固定荷重と積載荷重の和（令第 86 条第 2 項ただし書の規定により特性行政庁が指定する多雪区域においては、更に積雪荷重を加えるものとする。）とする。
 - ト) Bdi は、 i 階に生ずる加速度の分布係数とする。

チ) P_{di} は、 i 階に作用する加速度によって生ずる水平力とする。

⑤ 5. 2 欄の安全限界固有周期、工学的基盤における加速度応答、有効質量比 $Mu_g/\Sigma m_i$ 、係数 p 、 q 、 F_h 、 h 及び最下階の層せん断力係数は、計算する方向別に記入してください。

⑥ 5. 2 欄中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) m_i は、 i 階の常時荷重に相当する質量とする。

ロ) B_{si} は、 i 階に生ずる加速度の分布係数とする。

ハ) P_{si} は、 i 階に作用する加速度によって生ずる水平力とする。

ニ) Q_{si} は、 i 階に生ずる地震力の数値とする。

⑥ 7 欄は、特殊荷重の分布を略伏図等上に記入してください。

⑦ 8. 1 欄は、表層地盤による加速度の増幅率 G_s を略算によって求める場合には、精算によって求める場合のみ関わる事項は省略してください。

⑧ 8. 1 欄の「地盤調査の位置」は、平面図に調査方法とともに記入し、複数ある場合は、それぞれについて記入してください。

⑨ 8. 1 欄の「液状化のおそれの有無」には、該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入し、液状化の程度を記入してください。また、地盤改良を行う場合は、改良前の地盤について記入してください。

⑩ 8. 2 欄チの G_s の数値は、相互作用を考慮しない場合の数値も記入してください。

⑪ 8. 2 欄リの表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) 「深度」欄は、工学的基盤を最下欄として表示する。

ロ) V_{si} は、 i 層のせん断波速度とする。

ハ) ρ_i は、 i 層の密度とする。

ニ) u_i は、地震時の i 層の地盤からの相対変位とする。

ホ) δu_i は、地震時の i 層の地盤からの相対変位 u_i から地震時の $i-1$ 層の地盤からの相対変位 u_{i-1} を減じて得た数値とする。

ヘ) G_i は、地震時の i 層のせん断剛性とする。

ト) h_i は、地震時の i 層の減衰定数とする。

チ) 地盤改良を行った層は、「改良の有無」欄に○印を付けるとともに、改良後の特性値を記載し、改良前の特性値を () をつけて記載すること。

⑫ 8. 2 欄の加速度応答スペクトル図の作成に当たっては、横軸を周期、縦軸を加速度応答として図示するとともに、記載の考え方を示した資料を添付してください。

4. 「§ 3 応力計算」関係

① 1 欄の架構モデル図には、架構の支持条件、接合条件、剛域とした部分、耐力壁や筋かいの構造計算における様相、部材の剛性低下率その他必要な事項を略伏図等又は略軸組図等若しくはその模式図上に記入してください。なお、同一の図に図示することが困難な場合には、それぞれ分けて記入してください。

② 2 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した応力図について、3 欄から 5 欄までは、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に準じて作成した応力図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

③ 4 欄の表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) Q_c は、柱が負担するせん断力とする。

ロ) Q_w は、耐力壁又は筋かいが負担するせん断力とする。

④ 5 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した基礎反力図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

5. 「§ 4 断面計算」関係

① 1 欄の断面検定表の記載の考え方を示した資料を必ず添付してください。

② 1 欄の断面検定表には、原則として別表に掲げる項目を記載することとしますが、必要に応じて追加あるいは変更等を行うことができることとします。また、項目に付す記号については、それぞれ明確に定義すれば表の記号によらないことができます。

③ 2 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に従って作成した断面検定比図について、3 欄は、平成 19 年国土交通省告示第〇〇〇号に定める様式に準じて作成した断面検定比図について、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

6. 「§ 5 損傷限界変位・安全限界変位等」関係

① 1 欄及び 3 欄は、計算する方向ごとに記入してください。

② 1 欄への T_d の数値は相互作用を考慮しない場合の数値も記入してください。

③ 1 欄りの表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) m_i は、 i 階の常時荷重に相当する質量とする。

ロ) δ_{di} は、建築物の損傷限界時の i 層の基礎からの相対変位とする。

ハ) δ_i は、建築物の損傷限界時の i 層の層間変位とする。

ニ) h_i は、 i 層の階高とする。

ホ) 層間変形角の欄は、 δ_i を h_i で除した数値とする。

ヘ) 欄外に $m_i \times \delta_{di}$ 及び $m_i \times \delta_{di}^2$ のそれぞれの総和を記載する。

④ 2 欄は、層間変形角が 200 分の 1 を超え 120 分の 1 以内である場合にあっては、損傷が生ずるおそれのないことについての検証内容を記載した資料を添付し、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

⑤ 3 欄への T_s の数値は相互作用を考慮しない場合の数値も記入してください。

⑥ 3 欄トの D_f の選択した計算法については、平成 12 年建設省告示第 1457 号第 9 第 2 項第 1 号から第 3 号までのいずれかの該当するチェックボックスに「レ」マーク又はこれに代わる印を記入してください。

⑦ 1 欄チの表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) m_i は、 i 階の常時荷重に相当する質量とする。

ロ) δ_{si} は、建築物の安全限界時の i 層の基礎からの相対変位とする。

ハ) δ_i は、建築物の安全限界時の i 層の層間変位とする。

ニ) h_i は、 i 層の階高とする。

ホ) 「層間変形角 (安全限界時)」欄は、 δ_i を h_i で除した数値とする。

ヘ) 欄外に $m_i \times \delta_{si}$ 及び $m_i \times \delta_{si}^2$ のそれぞれの総和を記載する。

⑧ 4 欄は、安全限界変形角が基準値 (75 分の 1 (木造である階にあっては 30 分の 1))

を超える場合にあっては、安全限界変位に相当する変位が生ずる建築物の各階が当該建築物に作用する荷重及び外力に耐えることができることについての検証内容を記載した資料を添付し、対応する構造計算書の参照頁を記入してください。

⑨ 5 欄の表中の項目は、それぞれ次のとおりです。

イ) Q_{di} は、損傷限界耐力計算時に i 階に生ずる地震力の数値とする。

ロ) 損傷限界耐力は、 i 階の一の部材の断面に生ずる応力度が短期に生ずる力に対する許容応力度に達する場合の当該階の耐力とする。

ハ) Q_{si} は、安全限界耐力計算時に i 階に生ずる地震力の数値とする。

ニ) 保有水平耐力は、 i 階の一の部材が限界変形角に達する場合の当該階の耐力とする。

ホ) 判定 1 は、建築物の損傷限界時の各階の耐力を Q_{di} で除した比率の数値が 1 以上となる場合を OK、1 未満となる場合を NG とし、当該比率の数値とともに記入する。

ヘ) 判定 2 は、建築物の安全限界時の各階の耐力を Q_{si} で除した比率の数値が 1 以上となる場合を OK、1 未満となる場合を NG とし、当該比率の数値とともに記入する。

⑩ 6 欄は、計算する方向別に記入するとともに、建築物の地震に対する性能を示した曲線の記載の考え方を示した資料を添付してください。

7. 「§ 6 保有水平耐力等」関係

① 2 欄の「安全限界変形時の応力図」は、略軸組図等に安全限界変形時の曲げモーメント図を記載した上で、各方向すべての軸組の安全限界変形時における各部材の軸方向力、曲げモーメント及びせん断力の数値を記入してください。

② 3 欄の「塑性ヒンジ図・変形図（安全限界変形時）」及び 4 欄の「塑性ヒンジ図・変形図（保有水平耐力時）」は、略軸組図等又はその模式図上において、各階及び各方向の安全限界変形時における塑性ヒンジ及び変形の発生状況を図示してください。また、せん断破壊、引張又は圧縮破壊した部材等がある場合にあっては、これらの破壊状況を図示してください。

③ 5 欄の「各階の層せん断力変形角曲線」は、建築物の各方向それぞれにおけるせん断力と層間変形角又は層間変位の関係（以下単に「荷重変形曲線」という。）を図示してください。この場合において、荷重変形曲線の記載の考え方を示した資料を添付するとともに、次に定める事項に従って作成してください。

イ) 横軸を各階の変形、縦軸を各階のせん断力として、すべての階について図示する。

ロ) 建築物の損傷限界時の各階の耐力に相当する点を結んで図示する。

ハ) 建築物の安全限界時の各階の耐力に相当する点を結んで図示する。

④ 6 欄上段の「保有水平耐力とした時点」には、構造計算において保有水平耐力とした時点を具体的に記入してください。